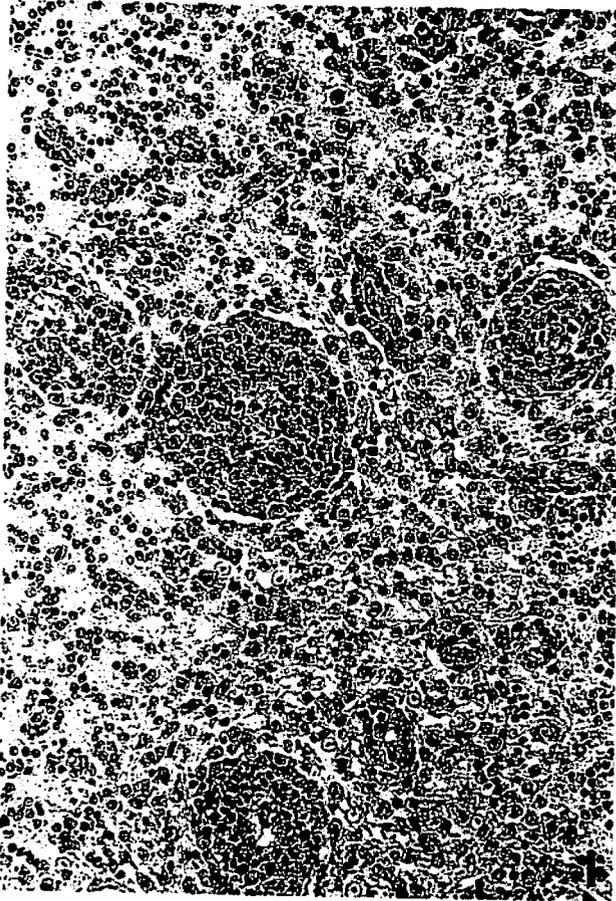


鶏の小脳及び延髄

鳥取大学農学部家畜病理学教室出題 第27回獣医病理学研修会提出標本No.479



動物：鶏，ハイラインW77，雌，156日齢。

臨床：発育が悪く，頭部を回転させる神経症状を呈していたため廃用とされた。この養鶏場におけるワクチネーションプログラムはMD（初生），ND & IB（4日，4週，12or13週），Pox（3週，13週），IC（6週，13週）であった。同様の神経症状を示す鶏が多発しているわけではなく，希な発生とのことであった。

剖検所見：体重は1.1kgで削瘦していた。剖検では卵巣萎縮及び卵莖性腹膜炎，左右心室壁の菲薄化及び拡張が認められた。脳の固定後所見では，小脳髓体，小脳脚および延髄右背側部にかけて境界やや不明瞭な白色限局巣が認められた。

組織所見：主要組織病変は肉眼病巣領域における腫瘍細胞増殖で，血管周囲，髄膜及び神経組織への浸潤性増殖が顕著であった。腫瘍細胞の核は明調で大きく，明瞭な核小体を1ないし数個有し，細胞質は豊富で円形ないし類円形を呈し，弱好塩基性ないし両染性で，有糸分裂像も屢々認められた（写真1，HE）。腫瘍細胞の細胞質はピロニン好性を示したが，酵素抗体法ではIgG及びIgMともに陰性であった。血管周囲および髄膜では腫瘍細胞に混じて小リンパ球の浸潤が見られ，これらは細網線維の網眼に存在していたが，腫瘍細胞自身が細網線維を形

成する傾向はなかった。また，部位によっては髄鞘脱落，大食細胞反応，胞満膠細胞の増殖も認められた。ホルマリン固定材料からの電頭検索では，腫瘍細胞の核はクロマチンに乏しく円形～類円形で，明瞭な核小体を有しており，細胞質の小器官も少なく，遊離リボソームがび漫性に存在していた（写真2）。また，隣接細胞との接着構造は認められなかったが，時折，細胞膜の突起様構造が見られた。

組織診断：鶏の脳原発性のリンパ肉腫。本例では脳以外に腫瘍性病変は見当らず，腫瘍細胞の形態学的特徴がリンパ芽球に類似することから上記診断名とした。鶏のリンパ性腫瘍として，マレック病あるいはリンパ性白血病が思考されるが，今回の症例は上記腫瘍とは形態学的にも好発部位としても明らかに異なっていた。細網内皮症に出現する腫瘍細胞にも類似することから，細網症で良いのではないかという意見も出されたが，超微形態学的には細網細胞よりもむしろリンパ芽球に類似すること，腫瘍細胞からのC型ウイルスの産生が認められないことから，細網内皮症は否定的であった。今回の症例は，犬で報告した同様の脳原発腫瘍（獣医病理学研修会標本No.442）と同一のカテゴリーに属するものと考えられた。